
まるでテンプレートな英雄譚

あれっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まるでテンプレートな英雄譚

【Nコード】

N2344V

【作者名】

あれつくす

【あらすじ】

奇妙な夢を見た朝、僕の腕には不思議な斑点が浮かび上がっていた。

そして、僕は旅に出る。意味のない、果てしない旅へ。

旅立ちと紋章（前書き）

どうしてもファンタジーが書きたくて書きました。ほとんどファンタジーを読まないのでテンプレートのような話が書きたかったです。自己満足です。

旅立ちと紋章

夢を見ていた。とても悲しい夢だ。僕の中の忘れていた過去を思い出させるような。しかしそれは目を覚ますと消えてしまう。僕はそれを残そうと必死で眠っていた。

目の前は真つ暗だ。そこに静かな二つの点がある。白なのかグレーなのかはわからないが確かにそこにある。だんだん大きくなり人の形になる。僕を手招きしている。片方は父だと思った。僕が幼い頃に殺されたらしく本物は見たことないが、何となくそう思えた。

僕はその手招きを受け入れたかったがどうも足が動かないようだった。目の前の二人は悲しそうな顔をしてこちらを見ている。そして、だんだん小さくなり、消えた。

「太郎。ごはんよ。降りてきなさい」

母さんの僕を呼ぶ声が聞こえる。なんだか変な気分だ。僕はどうか夢を見ていたらしい。なんの夢だったかは思い出せない。きつとどうでも良いことだったのだ。ベッドから這い出て、時計をチエックする。六時半。まだまだ眠られる時間だ。なぜこんな時間に起こしたのだろう。

そうだ。今日は父の命日だ。墓参りに遠くの山まで行く予定だった。それならば僕も早く準備しなければならない。そう思って僕は普段着に着替えようとした。

何か違和感がある。左肩が熱い。昨日は剣術の訓練をしたがいつもと同じ量しかしていないし、怪我をしたわけでもない。服を脱いで確かめてみた。

左肩には三列、三行の赤い斑点が縦に二セット出来ていた。なんなんだ、これは。病気なのか。いや、ただの怪我かもしれない。気付かないうちに小石が刺さったのだ。

着替えを済ませて、一階に降りる。

「おはよう、太郎」

「おはよう、母さん」

僕は自分の席に着き――席は二つしかないが――母さんに話し始めた。

「今日は父さんの命日だね。今年もまたあの遠い山まで行くの？」

「そうね。そうなるわね」

僕はうんざりだった。見たこともない父さんの為に徒歩で半日もかかる山に登るなんてばかばかしい。

「もういい加減あんなところに行くのはやめようよ。どうしてあんなところに墓なんか作ったのさ。もつと近くに……この家の裏庭にでも作れば良かったのに。おかげで僕はこんな斑点まで出てきた。あんなところに墓なんか作ったせいだ」

左肩を見せながら言った。出任せなのは悟られていただろう。

「太郎！ それが出てきたのかい？ ならもうあそこに行く必要はないよ。早く旅の準備をしなくては」

「母さん、どういうこと？ この点々は何？」

そう訊ねると母は「食べながら話すよ」と言って自分を席に座った。

「その斑点はハンコチューシャの紋章といって、この家系に代々伝わる紋章さ。十八くらいで現れるんだがお前は少し早かったようだね」

「じゃあそれと旅はなんの関係があるの？」

「その紋章が出る頃には皆旅に出なければならぬ。自分を成長させるためにね。だからお前に剣術を習わせてきたんじゃないか」

母さんの言っていることがわかってきた。だが、今は昔と違って、魔物だけでなく魔王の軍隊も町の外を歩いているのだ。そう簡単に町の外は歩けない。

「母さん。今は昔と違うんだ。魔王軍だっているし、旅なんてできっこないよ」

「なら魔王を倒しなさい。それが出来るまで家には帰ってこなくて

「いいよ」

「そんな……。僕に死ねって言うの？」

「今から私は支度をするからあんたは町の人々と王様に旅立ちの挨拶をしておいで」

そう言う母は食べ終わった食器を洗い場へ持って行った。目尻が光っていたように見えた。

僕はどうすればいいか迷ったが挨拶に行くことにした。もう二度と会うことはないかもしれない町の人々に。

冷静に考えてみるとおかしい話だった。なぜ僕が旅に出なければならぬのか。母さんの話は筋が通ってはいるが、反発せずにはいられない内容だった。

花子に相談してみよう。いや、その前に真偽を確かめねばならない。それ自体は簡単だ。王様に会いに行けばいいのだ。わざわざ王様を引き合いに出したのは何か理由があるに違いない。なければそれまでだが……。

家を出て数分後、僕は王宮の前まで来ていた。門は固く閉ざされており両脇に衛兵が立っていた。

「百姓の太郎だが、王様に会いたい」

用件だけ伝える。これで通れるはずがなかった。魔王軍との確執で王様は命を狙われ、最近は式典にも顔を出さない。こんな見ず知らずの百姓が通れるはずがない。

「入れ」

あっさり通されてしまった。これでいよいよ真実味を帯びてきた。

僕は右側の衛兵に連れられ王の間へと導かれた。

もともとここは砂漠の国なのでどの家も岩で出来た床だが、それはここでも同様で岩の上に絨毯が引いてあるような簡素な部屋だった。その部屋の中央には豪華な椅子があり王様が座っていた。

「太郎よ、よくぞ参った。思えばあの時から十六年か。長かったぞ。ここへ来たと言うことは出たのだな。斑点が」

なぜ知っているのか気になったが、王の手前、質問に質問で返すようなことは出来なかった。

「はい。ここに」そう言つて袖を捲り左肩を見せる。

「では、旅に出るのだな。お前に渡さなければならぬ物がある。ついてこい」

王様は立ち上がり椅子の向こう側にある部屋へと歩き出した。僕も歩きながら追いついた。

「お前の父親が使っていた剣だ。恐ろしく良く切れる。お前を守ってくれるはずだ」

王様は父親の事を知っている。そういえば母さんからは父の話はほとんど聞いたことがなかった。僕が幼い頃に殺されたということ以外は職業も、容姿さえも知らされなかった。今聞くべきかもしれない。もう母さんとは会つて話せないのだから。

進んだ部屋の中には一振りの剣が地面に刺さっているだけだった。

「名前はフォーキ。これを持って行け」

僕は意を決して訊ねてみることにした。

「父を、知っているのですか」

「聞いていないのか……。お前の父は勇敢な戦士だった。私から見ても偉大だったよ。何万ものゴブリンの軍勢に一人で立ち向かい、何食わぬ顔で大将を仕留めてきた。我が国の誇りだった」

父は百姓をしていたと思つていたので意外だった。しかしそのせいで死んだのだと思つた。もし百姓をやっていたなら、今日もサボテンと格闘していたに違いない。

「さあ、剣を取れ」

僕は言われるがままに剣を引き抜いた。美しい剣だった。

「もう一つ渡す物がある」

王様はそう言つとおもむろに懷から紙を出した。

「これをヨーミンの王に届けてくれ。立ち寄つたら構わない。魔王軍に見られそうになったら焼き捨ててくれても構わない。渡すときはショークの王から預かつたと言つてくれ」

わかりましたと言って紙を受け取った。町の外にほとんど出たことのない僕はヨーミンがどれほど離れていてどんな国なのかは全くわからなかったが、了解することしか出来なかった。

「それともう一つ。お前には双子の弟がいる」

啞然とした。そんな話は聞いたことも無かった。母さんが言わなかっただけなのか。父の正体も弟の存在も隠されていただけで存在しているのだ。僕はまだ十六。周囲の事さえまともに知らされていないのかもしれない。母さんは本当の母ではないかもしれないし、あるいは王様が父かもしれないと思った。

「なぜそんなことまで知っているのですか」

「衛兵！ 外へ出せ」

僕は両手を掴まれ門まで引きずられた。何もかもがわからなかった。このまま旅に出て良いものなのか。僕の頭は空っぽで嘘しか詰め込まれていない。弟がいることも嘘だ。父が戦士だったことも、この左肩の斑点も全部嘘だ。嘘つきだらけのこの国を離れて、どこか遠くに行こう。その為にはこの状況は好都合だ。

僕は失礼しますとだけ言い残して王宮を去った。まだやることが残っている。

旅立ちと紋章（後書き）

この作品はスターウォーズを見ながら書いたもので少なからず似ている部分が今後出てくるかもしれませんが、それは似ているだけです。気にはいけません。

花子の真意（前書き）

短いспан、短い文量で投稿するのは自分に良くない気がします。

花子の真意

花子に会いに行かなければならない。一刻も早く町を出たい僕は町人には挨拶をせずに町を出ようと思ったが、花子にだけは告げておきたいと思った。

花子とは生まれてからずっと兄妹のように育てられた女性のことだ。家は隣で父親がいないうちの家事を、母さんが仕事をしている間手伝ってくれたりする。昨日も剣術の練習を横で見てくれた。一年は僕の方が上だが、僕より少し上品なので姉のようだった。いずれは結婚して共に家庭を築いていくような気がしていたが、こんな別れが来るとは思いもしなかった。もちろんお互い思いを告げる事はしなかったので、独りよがりな部分もあるがおおかたはそんな感じの関係だった。

花子に会うには家の前を通らなければならなかった。幸い母さんの顔を見ることはなかった。ほっとしたような残念な気持ちになった。

花子の家についた。家の前では花子の母親が布団を干していた。僕の方を不審そうに見ていたが、僕は軽く会釈して花子を呼んでもらった。花子はすぐに出てきた。

「どうしたの」

「話したいことがあるんだ。ここでは言えない」

「奇遇ね。わたしもよ。外の高台に行きましょう。あそこなら大丈夫よ」

何が大丈夫なのかはわからなかったが、彼女に連れられるまま高台へ向かった。高台は町の外にある。町とそれの間には大きな砂丘があり、高台からは町は見えない。僕は訊ねた。

「君の用事は何なんだい」

「あなたから言っただけだよ」

彼女の用件が気になったが僕は自分から話すことにした。相手の

用件が気になるのは彼女も同じだ。

「今日、町を出る。旅に出るんだ。もうここには戻ってこられないと思う。君を呼んだのはさよならを言うため」

本当は戻ってこられないのではなく、戻りたくないだけだった。もちろん魔王を倒せるわけではないが、少し間を開けて帰れば母さんにも許してもらえ気がしていた。

「……そうね。わたしも付いていくわ」

「それは駄目だよ。君は、駄目だよ。とにかく駄目なんだ」

「どうして。足手まといにはならないわ。野宿するときだって見張りを交代で出来るようになるし、狩りだっていつかは覚える。その……夜の営みだって、させてあげないことは」「駄目なんだよ」そう言っ僕はそっぽを向いた。

彼女を巻き込みたくなかった。理解不能な事態に巻き込まれるのは僕だけで充分だった。確かに道連れが欲しい所ではあるが、彼女についてきては欲しくはない。普通の女の子でいて欲しい。

しばらくの間沈黙していた。ここにいると町の喧騒は全く感知出来なかった。黙っていても耳は砂漠の風をせわしく感じていた。視界には広大な砂漠と馬鹿みたいに青い空だけがあった。いつそのこと空が落ちてくれればいいのに、と思った。

振り返ると彼女がいる。おそらくいる。このまま家に帰り、荷物だけ受け取って旅に出ようかと思った。それが一番簡潔で容易な方法だった。そのためには小石ほどの労力と無神経な勇気が必要だった。

僕は臆病だ。言い訳はしない。このまま謝って家に帰ることに決めた。

「ごめん。連れて行くことはできないよ。でも——」町の方向から煙が上がっていた。おそらくそれは狼煙ではない。空には異常なほど大量の煙のラインができていた。空が落ちてこないように支えているのかもしれない。

彼女はあっけにとられて見ているわけではなさそうだった。もち

るん僕もそうである。

「町へ戻ろう」

彼女の手を引き、町へ駆けだした。彼女の手は重かった。

町の中は悲惨だった。人と家畜は焼かれ、そこら中から火の手が上がっていた。人が焼かれる臭いをそのとき初めて知った。臭いだけではない。色も音も。悲鳴を聞かなくて済んだだけでも良かったのかもしれない。まだ生焼けの死体も多く、それらはすでに殺されてから焼かれたようだった。死体の皮は焼けただれ、眼球がえぐり取られている者もいた。またある者は全身の皮を綺麗に剥ぎ取られたあと焼かれ、皮は縁側に干されていたりした。爪が剥がされている者もいた。腕や足が無い者もいた。皆一様に火にくべられていた。そしてそれは王宮も例外ではなく、窓からは黒い煙が上っていた。きれいに塗られた土壁は崩れ、荒々しい岩のオブジェに成り下がっていた。

僕と彼女は自分たちの家が在ったところに向かっていた。彼女の手は依然として重いままだったが、息遣いから彼女が泣いているわけではないということがわかった。

僕の家には誰もいなかった。かなり荒らされてはいたが、血もついていなければ、壁が崩れているわけでもなかった。ただ人の形をした肉片が転がっているだけだった。

最初は母さんだと信じたくはなかった。しかし、目、耳、鼻、口と確認していくにつれて確信しなければならなかった。これはかつて母であったものだ。

涙は出なかった。あと一回会うか会わないかの違いなのだ。帰る場所がなくなつて気付いたことがある。僕は母が嫌いではなかった。母を裏庭に埋葬して家の外に出ると彼女が立っていた。

「わたしも連れて行って。異論は認めない」

魔王の軍が攻めてきた。それは変わることはない事実だった。

僕は魔王を倒すだろう。母の元へ帰るためではなく、自分のため

に。義務ではなく権利だ。法のない世界で生きていくことになる僕
にはそれだけがルールだ。規則だ。法だ。
異論は認めない。

花子の真意（後書き）

一話とは違い、文学風に仕上げてみました。そうはいつでもファンタジーです。

旅人（前書き）

今回は総集編ではないですが、振り返りが多いです。

旅人

幸運なことに畑は荒らされていなかった。魔王軍の目的は略奪ではなく殺戮のようだった。この辺りに軍がないことを考えるともう去ってしまっているに違いない。彼女を畑の側に座らせ、僕はサボテンを取りに行った。慣れた作業だった。

「食うか」

彼女にサボテンの破片を渡す。この砂漠で生きて行くにはサボテンは欠かせない。旅に出るにはありったけ用意していく必要があった。それに僕はこの町以外の集落へは行ったことがなく、どこか人がいる場所までどれくらいかかるか全くと言っていいほどわからなかった。

「花子。どこか近くに立ち寄れる所ないかな」

花子は虚空を見つめたまま動かなかった。もしかしたら彼女は母親の悲惨な姿を見てしまったのかもしれない。その可能性は高い。僕の母もさっきまでは家に転がっていた。

「西へ行きましょう。わたし聞いたことがあるわ。西には森があってそれを超えると小さな村があるのよ」

いきなり饒舌に話し始めたので驚いたが、落ち込んでいるわけではなさそうだったので安心した。彼女は僕を見つめ再び口を開いた。「コンパスならあるわ。サボテンを入れる袋ならわたしが持つてる。他に何かいるの？」

彼女があまりにも平静だったのは女だからだろう。昔、女は強いという話を聞いたことがある。その時は上手く理解できなかったが、なるほどこういう事だろう。思っていたよりこの旅は上手くいきそうだった。

「何も要らないよ。じゃあ行こうか」

そう言って僕は町を出た。もう戻ることはないだろう。

歩き始めて一日経った。昨日の晩は歩き続けた。二人とも休む気分になれなくて結局朝になってしまった。それに砂漠の夜は冷えるもし寝てしまっていたら、今頃、凍死していただろう。

朝になってようやく、交代で寝ることに決めた。最初に寝たのは彼女だった。僕はその間一人で見張りだ。

その間に今まで起きたことを整理してみた。左肩に斑点が出来て、墓参りが中止になった。墓参りに行っていれば母は助かったかもしれない。見せなければ良かったと思ったが、すぐに気が変わった。見せなければ、花子が死んでいたのだ。僕が彼女を誘って高台に上らなければ彼女は死んでいた。

いや違う。彼女が高台に誘ったのだ。確かに場所を変えようとしたのは僕だが、それは誰にも聞かれない場所、さしずめ路地裏などでよかった。なぜ誘ったのか。彼女にも用件があったからだ。そうだ、彼女に訊ねなければならぬ。それは起きてからで良いだろう。王宮にも行った。父の職業と弟の存在を聞かされた。父の最期はどんなだっただろうか。弟は今どうしているのか。それは今となっては知る由もない。王も母も死んだ。本当に王は死んだのだろうか。死体を確認したわけではない。確かに王宮はボロボロで人がいそうではなかったが、衛兵の死体も見なかった。もしかしたら、死体の山に紛れて骨になっているかもしれないが、そうでないかもしれない。

それに僕の肩に斑点が出てすぐの襲撃とは何を意味するのだろうか。全く関係がないのかもしれないが、それなら朝より夜の方が都合だ。高台に上るまでに僕が出会った人が三人。母さん、王、衛兵。この三人の誰かが魔王軍に密告したのなら、辻褄が合わないこともない。母は除外して良いだろう。なら王か衛兵……。

そんなことを考えるのはよそう。全ては偶然なのだ。それに僕の斑点ごときが魔王軍に影響するわけがないではないか。

剣の事を思い出した。王は父の剣だと言った。名はフォーキ。もしかしたら、これが原因かもしれない。王の話によると良く切れる

そつだ。だつたらそれを狙つて来たという考え方も出来る。いずれにせよ、ここで考えても何も変わらない。

そつ言えば、魔王の軍は何処へ行つたのだろうか。町をあそこまで破壊したのだ、かなりの人数だつたに違いない。行軍速度は高くないはずだ。西の村が一番近い集落ならそこで補給をするはずだ。

西以外に集落があるのか？ その可能性も捨てきれない。ここまで歩いたが森が見えてくる気配はない。彼女が間違えているのかもしれない。二人旅で相手を疑うことはしたくないが、あまりに遠すぎる。まだ持つてきたサボテンがあつたがそれも直に尽きる。そうなつてしまえば僕たちは砂漠の砂も同然だ。

遠くに何か見えた。自分たちがやつてきた方だ。良く目を凝らすと黒い点にしか見えなかつたが、変に胸騒ぎがして彼女を起こした。彼女は揺るとすぐに起きた。

「どうしたの」

「何かいるみたいだ。人が大型の動物か。どっちにしてもあんまり良いものではないような気がする」

「そんなことないわ。人なら道を尋ねられるし、動物ならその剣で倒して食べられるじゃない。あなたは悲觀的すぎるのよ」

そうかもしれない。彼女に言われるまで気がつかなかつたが、薄々は自覺していた。きつと疲れているのだ。

「疲れているんだよ。たぶん」

「そうね。わたしもそう思うわ。でもあつちはちゃんと見ててちょうだいね」黒い点を指さしながら言った。

そんなことを話している間にも黒い点は大きくなっていき、フィッコに乗った一人の男が見えてきた。右手で手綱を持っており腰には剣を差していた。重そうな鎧を身につけいかにも兵隊、といった格好だ。男の鎧とその体重、それに自身の体重まで支えているフィッコの足はプルプル震えていた。

フィッコとは大型の爬虫類で主に砂漠に生息している。二本足で立つのだが、砂漠の馬とまで言われかなりの荷を運べる。そのフィ

ツコが辛そうなのは恐らく男の体重が原因だろう。身長はそうでもないが横幅がとてつもなく広い。つまり男はデブということだ。

それでもフィツコは普通の大人なら二人で乗れる生き物なのだ。今はフィツコがとても可哀想に見える。

「お前たち。そこで何をしている。名を名乗れ」

不意に話しかけられた。ぼんやりしていたので近づいて来ていたのに気付かなかった。

「わたしは節子で、彼は光博です」

どうやら偽名を名乗ったようだった。相手が誰かわからぬ以上賢明な判断だった。男はフィツコから降りて右手を剣の柄に当てた。

「それは嘘だ。お前は花子でこいつは太郎だ。間違いないな？」

斬りつけてくるのはわかっている。しかしそれをどう対処するかが問題だった。僕は剣を持っているが、しゃがまないと取れないだろう。そうしている間にも斬りつけられるリスクがある。それに剣を取れたとしても相手には鎧があつた。どれほど切れ味の良い剣でも鎧を貫通させる事など出来るわけがない。加えて彼女は戦闘には慣れていないので狙われると終わりだ。だが、返事をしない限り襲ってくることはなさそうだった。

「返事をしろ。間違いないんだな？」

彼女が動いた。男に体当たりを仕掛けたようだ。僕に出来ることは剣を取ることで。しゃがみ込み剣を取る。彼女は男と距離を取り、僕が戦い始めるのを待っているようだった。

剣を構え、男の方へ向き直る。男も起き上がり、剣を構えた。

ここで恐らく僕は死ぬだろう。相手はかなり手練れている様子だった。動きも静かで隙がない。もちろん僕もそうあれるように努めるが、埋めようのない実戦経験の差があるように思う。

人は死ぬと天国に行けるらしい。もちろん善人だけだ。僕は今までこれといった良いことはしてこなかったが、悪いこともしなかった。これはどうということだろう。天国に行けるのか。はたまた地獄に堕ちるのか。否、答えは死なない、だ。

一
氣に踏み込み、剣を振り下ろした。

旅人（後書き）

ありがとうございます。

なんか推理小説みたいに思考する場面が入ってしまいました。

毎回、作風を変えて書いたら面白そうです。でもファンタジーって本来どういう書き方をするのでしょうか。

終焉（前書き）

適当に終わらせて申し訳ないです。もうファンタジーは書きません。

終焉

剣は僕の真下まで振り下ろせた。何かが擦れたような音がしたが手応えはなかった。剣は中程で折れており、剣先は足下に落ちていた。

「本当にそのなまくらで切れると思ったのか？ お前の持っているそのゴミはただの贗作だ」

「これは父の形見なのだ。そんなはずはない」

「まだわからないのか。お前は王に騙されていたのだ」と男は言った。「本物のフォーキは俺の持つこの剣だ。現にお前のは今、俺が切った。それが証拠だ」

僕はわからなかった。何処までが真実で何処までが嘘なのか。僕の全ては虚構で固められており、真実など何処にもないのではないか。しかし僕には思考している暇などなかったのだ。

「花子！ 逃げろ」僕は彼女を逃がそうとした。物語の主人公は大抵そうするものだった。

「無駄だ。もうここからは逃げられない。とりあえず、お前から殺してやるう」

男は剣を構え、近づいてきた。彼女が逃げたかどうかはわからなかったが、男は僕だけを狙っていた。あるいは彼女を殺す気はないのかも知れない。

「このフォーキは触れたもの全てが切れる魔剣なのだ。まずその忌々しい左腕から切り落としてやるう」

男は僕の左腕に向けて剣を振った。僕はとっさに手に残っている剣で防ごうとしたが、防いでいる感覚は得られなかった。気付くと剣は柄だけになっており、地面には残っていた剣の刃と、左腕が手首とそれより上に別れて落ちていた。痛みはなかった。

「痛すぎて声も出せないか。すぐに楽にしてやる」「なぜ王は俺を騙した」

思い切って訊ねた。死ぬ前に知っておきたかった。

「簡単なことだ。魔王に頼まれていたのだ。お前を殺すように」

「なぜすぐに殺さなかった。なぜ町人まで殺した」

「魔王に迎合する必要があったからだ。すぐ殺さなかったのはお前の母親を逃がさない為だ。お前は知らないようだが、お前の母は有力な白魔導士だったのだ。勘づかれて逃げられると面倒なので、魔王軍が到着するのを待っていたのだ。到着して殺戮を始めたとき、お前を見つけられなくて焦ったが見つかって良かった。これで問答は終わりだ。余計なことを知った分、辛い死に方をさせてやろう」

じわじわと左肩——もちろん左肩がくっついていた部分だが——が痛くなってきた。かなり出血しているらしく息が荒くなってきた。このまま死んでいいものだろうか。僕は魔王に復讐するところかこんな男さえも殺せないのだ。

男は私の右足を太股辺りから切り落とした。何か邪魔なものが切り落とされた気がした。もしかしたら僕にとっては足など必要ないのかもしれない。バランスを崩し地に伏した。

「おい。まだ死ぬなよ」

男の声が聞こえたが返事はできなかった。肉体的苦痛はなかったが、精神的苦痛と抗うことの出来ない血液の損失のため口が動かないのだ。

「死んだのか。あの女は俺たちが最期まで遊んでやるから心配するな」

そういつて足音は遠ざかっていった。

僕はまだ生きている。彼女がその後どうなったのか、魔王軍がなぜ僕を殺そうとしたのかはもうわからないが、僕にはどうでも良いのだ。ただ僕が生きてさえいればいいのだ。

あのあと僕は死を覚悟したが今いるこの村の若者に助け出され一

命を取り留めた。幸運だった。僕も、僕を助けてくれた彼も。僕が倒れていた辺りは魔王軍と王の軍がいたはずだった。彼は運良くそれに見つからずにその辺りを通り、僕を見つけて連れ帰ったのだ。なぜそんな所を歩いていたかはわからないが僕にそんなことは関係なかった。ただ助けてくれれば良かった。

この村は森の中にあり資源も豊富だ。僕には左腕と右足がないが面倒を見ってくれる人がある。働かずとも食事を用意してくれる。あの男に襲われる前より生活は楽になった。もちろん手足が不自由なのは困るが、全てはこれで良かったのだ。なぜなら僕が生きているから。

終焉（後書き）

最期までお読みいただきありがとうございました。エタリたくない
のでとりあえず完結させました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2344v/>

まるでテンプレートな英雄譚

2011年8月28日03時21分発行